2015/4/27

社会科学習材開発セミナー

M151278　村田翔

# 教員養成のための教材の理念と構成、その指導者に求められる資質・能力
# 田部俊充他編著『大学生のための社会科授業実践ノート 増補版』の場合

【発表構成】

I.　はじめに
II.　編著者の意図
III.　『大学生のための社会科授業実践ノート 増補版』の概要
IV.　考察
V.　おわりに

## I.　はじめに

本発表では、教員養成を担当する教師教育者に対して求められる資質能力を明らかにするために、社会科教育に関する講義で使用される教材について分析し、教材の理念と構成を明らかにする。そして、この教材を活用して教員養成課程等で講義を行う教師教育者には、どのような資質能力が求められているかを検討する。

## II.　編著者の意図

この項では、編著者がこの書籍を刊行した意図について述べていく。まず、編著者の一人である田部は、この書籍の「対象者」を以下のように記述している。

「対象は、小学校の教員や中学校の社会科教員及び高等学校の地理歴史科教員を目指す学生の皆さん、社会科・地理歴史科の授業作りに悩む現職の小・中・高等学校の先生方です。免許更新講習や 10 年研修等の現職研修のテキストも想定しています。」

つまり、①教員養成課程に在籍する学生②学校現場の現職教員③免許更新講習や 10 年研修等に参加する教員、この三つの立場の人々に活用されることを推奨している。本発表では、①に焦点を当てる。

さらに、田部はこの書籍における具体的な目的として、以下のように記述している。

「具体的には、社会科・地理歴史科の目標や内容を理解するとともに、単元の指導計画や本時の学習指導案の作成に取り組み、社会科教員、地理歴史科教員として求められる実践的指導力を高めることを目的としています。」

つまり、①社会科・地理歴史科の目標や内容の理解②単元の指導計画や本時の学習指導案の作成③社会科教員、地理歴史科として求められる実践的指導力を高める、この 3 つの目的を達成できるように執筆された書籍である。

## III. 『大学生のための社会科授業実践ノート（増補版）』の概要

この書籍の目次は以下に示したとおりである。


1. 理論編

1-1. 小学校社会科学習指導要領

1-2. 中学校社会科学習指導要領

1-3. 高等学校地理歴史科学習指導要領

1-4. アメリカ社会科に学ぶ

1-5. 地誌学習

1-6. 地理情報と地図化による地理的技能の育成

2. 実践編

2-1. 模擬授業づくりのオリエンテーション

2-2. 学習指導案と授業記録の書き方と活用の方法

2-3. 新しい機器を使った授業記録の取り方

2-4. 新学習指導要領に対応した授業―小学校第 4 学年「地図たんけん」をしよう―

2-5. 社会科と総合的な学習の時間と外国語活動の連携―小学校第 6 学年「日豪の文化を伝え合おう―

2-6. 「米どころ」越後平野の変容―中学校社会科地理的分野「身近な地域の調査」の事例として―

2-7. 中学校社会科公民的分野の模擬授業を作る―「政治学習」を中心に―

2-8. 新学習指導要領の視点を取り入れた世界史 B の授業実践―「空間軸からみる諸地域世界」の単元開発

2-9. 高等学校日本史 B の実践「寛政の改革（松平定信政権）の授業実践」―田沼意次政権と比較して―

2-10. 高等学校地理 B の実践「地球儀作りを通して地理認識を育てる授業」

3. トピック編

1. 入門機における地図・地球儀指導と ESD
2.「地域安全マップ」の作製と社会科
3. PISA をめぐる学力議論と社会科
4. 地域社会の変容と教育
5. 身近な地域でのエクスカーションの指導
6. 探せ！私の身の回りにある Made in Asia
7. 農業地理の教材化
8. イギリスの社会系教育
9. 社会系以外の教科における地図の活用―「地図」「音楽」「歴史」の連携―

この書籍の特徴は、まず「1.理論編」「2.実践編」「3.トピック編」という大きく 3 部構成から成り立っている。そして、「1.理論編」と「2.実践編」それぞれの項数を合わせると、おおよそ 1 セメスター分（15 回分）となり、社会科教育に関する大学内での講義で活用できることを想定している。校種によっては、扱う必要がない個所もあるので、その不足分は「3.トピック編」で補うことで 1 セメスター分の講義を実施していることと思われる。

また、この書籍では、活力のある社会科・地理歴史科授業を作り上げるために議論材料として、「課題」を設定している点も特徴の一つである。

ここから、各章の内容について述べていく。「1. 理論編」では、社会科教育の内容や目標について、現在の学習指導要領に即して述べられている。そして、日本の社会科の活性化を目指して、モデルとなったアメリカ社会科の現状を振り返ったり、社会科教育、特に地理教育の一つとして地誌学習について課題を整理したりしている。

そして、この書籍の特徴の一つとして「1.理論編」の学習指導要領に関する内容を中心に穴埋め形式で読んでいく個所が多数存在している。この穴埋め方式は、「2.実践編」においても存在している。

「2. 実践編」の内容は、大きく二つに分けることができる。まず、2-1 から 2-3 までの内容は、模擬授業や学習指導案の作製、授業記録の取り方という教員採用試験や実際の学校現場においての具体的な事項について記述している。これは、学生が教育実習や学校現場での活動を行う際には、参考にしやすいことから、より実践に近い内容を提示したいという意図が伺える。多様な授業づくりの方法を提示することで積極的に模擬授業等を進めてほしいという編著者らの要望が見受けられる。

次に、2-4 から 2-10 までの内容は、小学校・中学校・高等学校における社会科・地理歴史科の実践や単元開発について提示されている（2-4・2-5 が小学校、2-6・2-7 が

中学校、2-8・2-9・2-10 が高等学校の実践)。これらの実践は、新学習指導要領に即した内容であり、各実践の前には必ず学習指導要領における位置づけを述べている。すなわち、社会科の本質的内容ではなく、改訂された現行の学習指導要領を前提として実践が進められている。この「2.実践編」では、いずれの実践報告並びに授業開発において、必ず学習指導案もしくは単元計画が一緒に掲載されている点も特徴である。授業分析よりも指導案作成や模擬授業に重点を置いているという意図が伺える。

「3.トピック編」は、学習指導要領や具体的な実践内容からは少し離れて、今日の社会科における新しい話題を取り上げており、社会科教育における新たな取り組みを提示しているのではないかと考えられる。

この書籍全体を通じての特徴は、学習指導要領や現代の課題の認識を重要視している点である。特に現行の学習指導要領が施行されるにあたっての改訂のポイントやその根拠となる問題を提示している。また、「3.トピック編」にもあるように近年話題となっている社会科教育に関する事項もまとめており、10 年経験者研修や免許更新講習での使用も推奨されている。

以上のことを踏まえると、先週の本講義で使用した渡部他論文（2010）で提示されていた 4 つの類型の中で考えてみると、「現代課題対応型」に近いと推測する。

## IV. 考察

ここからは、本書の内容や構造を踏まえてこの書籍を扱うべき人材やこの書籍を使用する教師教育者に求められる資質能力について述べていく。

この書籍は、学習指導要領に即した内容が非常に多い。また、模擬授業や学習指導案を数多く掲載し、より実践を意識した内容であることが特徴の一つである。つまり、学んだことをすぐに活用できるような立場の学生には、この書籍が非常に有効であるといえる。その立場にある学生は、まず教育実習前の学生が当てはまると考えられる。教育実習等で実際に学習指導案や本時案を作成し、授業を行うには、現行の学習指導要領の内容を理解することは必要不可欠である。授業実践のテーマについて、もまだまだ経験や知識が少ない学生にとって、実践で応用できるようなテーマが数多く提示されているので、参考にしやすい書籍である。

また、この書籍は、特徴の一つとして学習指導要領等が穴埋め方式になっており、学習指導要領を覚えながら具体的実践も学ぶことができる。教採対策を控えた学生や卒業間近の学生に対しても有効活用することができると考えられる。

では、教員養成を行う教師教育者には、この書籍を用いて教育実習前や卒業間近の学生に対して社会科教育を教授する際、どのような資質能力が求められているのか。

まず、現代の様々な課題をしっかりと把握し、その課題を教育につなげる能力が必

要ではないか。この書籍では、「2.実践編」において多数の実践が提示され、その根拠となる学習指導要領についても言及されている。その多くが、「1.理論編」で取り上げられた学習指導要領改訂のポイントやそれに関連した課題となっている。学生に対して、より実感を伴った理解を図るためにも、教師教育者が現代の課題に対してその構造や現状、対策等について認識を深めておく必要があると考える。

次に、教師教育者の求められる資質能力として、実践などを学生に実感できるような方法で提示できる能力が必要であると考える。この書籍では、多くの実践事例が取り上げられている。しかし、これはあくまで実践者もしくは観察者が捉えたものであって、講義で再現できるものではない。そこで教師教育者は実践を提示するに際し、様々な手立てをする必要があるだろう。たとえば、何らかの実践ＶＴＲを流すという手法もあるだろう。だたし、その際、教師教育者はただ見せるわけではなく、どこに焦点を当てるべきなのかを予め明確にすることが大切となる。ここも教師教育者の裁量によって教育効果が大きく変化するところではないかと考える。

いずれも教師教育者は、自らの信念等を伝えるだけではなく、現代の状況に即した内容も交えながら、実感を持たせることができるような講義を展開していくことが求められるだろう。

## V. おわりに

最後にこの書籍から得られた知見について述べる。この書籍は、現代の課題、とりわけ学習指導要領とその改訂に至ったポイント、それに関連した課題を提示し、より実践的な内容を示した。さらには模擬授業の進め方を示したり、社会科教育における新しい話題としていくつか紹介されたりしている点も様々な課題に対応してほしいという編著者らの意図が見受けられる。

しかし、この書籍で一番欠落している部分がある。それは、社会科をなぜ教える必要があるのかということが全く述べられていない点である。この書籍はどのように教えるのかという点に集中している。このままでは、学生たちは、何の疑いもなく社会科を教えるだけになってしまう。ただ単に教えるだけだと、その児童生徒も同じように認識し、再生産が続いた結果、社会科教育に対する思考が停止する可能性がある。これを防ぐために、教師教育者自身もなぜ社会科を教える必要があるのか、その根拠となる考え方はどこにあるのかということを認識しておく必要があるだろう。

（参考文献）

渡部竜也他「我が国の初等・中等社会科教員養成の実態に関する基礎的研究(Ⅱ):「社会科教育法」シラバス分析及びアンケート調査を通した仮説の検証」『東京学芸大学紀要.人文社会科学系』Ⅱ,61,1-35